

七 あ の 山、こ の 川

海外での遊と学

インドの思い出

外国へ行って、そこで学問を勉強してくることを、むかしはいみじくも、海外遊学といった。現代の日本語では、遊学の遊びが気になるのである。昔の遊学の例には、およそ遊という字を「あそび」などと思つては、理解にくるしむ、いかめしい例が多々ある。高木貞治(数学)のときには、文部大臣が横浜の埠頭まで見送つたというから、今でいえば南極観測隊の出発に当たるのであるうか。本多光太郎(物理学)は、学都ゲッチンゲンで、下宿と大学研究室との往復路以外どこにもゆかず、実験に専心した。博士が重病という噂をきいてベルリンから訪れた日本の友人に対して下宿のおばさんいわく「忙シクテ病氣ニナル暇ヲ、本多サンハモタヌノデアル」。これらをも、当時は遊学と

いった。この六十年のうちに、日本語もだいぶ変わったのであろう。

ジェット機を利用できる現代であるから、旅費と時間との工面がつけば、海外へ出張することは、むかしにくらべてずっと手軽にできる。そのためか、むかしとは、違った意味での遊学ができるようになった。

私の海外遊学の皮きりは、数学者にはきわめて異例のことだが、独立後まだ年数もたたぬインドからはじまった。一九五三年のことだが、四月から八月まで、カルカッタ郊外のインド統計研究所に招かれ、東南アジアから集まった統計実務家のための講義をうけもった。インドの統計調査に関連した問題を契機として、理論的な研究をするのも、もう一つの仕事である。遊と学とをわけると、ここまでは、まあ学の方に属するということになる。では遊の方にあたるものは、何があったであらうか。当時の日記をのこしていないので、考証すべきものもないのであるが、ただ一つ、次のような文句が、計算の下書のなかにかきのこされている。

(一)

ハウレイの岸 舟唄かなし

濁りて流るる ガンジスの河

(二)

日は照りかえる フグリの橋を

民みな素足 歩みて行けり

(三)

をちこちにして 臥(こや)れる民の

まとえる衣の よごれかなしも

(カルカッタ小景、一九五三年)

私はこのとき、単身赴いたが、書斎、寢室、台所の三部屋を提供され、専属のコックが一人世話にあたるという豪勢な待遇であった。しかしなにか心楽まないものがある。眠苦しい炎暑の南国の夜おそく、付近の民家から、四階の私の部屋の窓辺に伝ってくる音楽は暗い闇を通じて、物悲しく胸をうつ。付近の民家の粗末さ。彼らは、独立の動乱のとき、身一つで東パキスタンから避難し逃走してきたという。しかし彼らはともかく家があるから、まだよい。カルカッタの繁華街を少し夜ふけて自動車を走らせていると、歩道のいたるところで、よごれた衣を頭からひっかぶって、ここを一夜の寢床としている多数の人民を見かける。

研究と指導の間

インドには、その後、一九五六年十二月から翌年一月までの第二回、昨年四月末から五月上旬までの第三回と、計三回の訪問の機会をもった。第一回の渡印以来、インドには、わたくしにとつて

は、恩師と仰ぐ方もあれば、同じ学問分野の友人もいる。頼まれれば、親身になって、研究所のあり方や将来について、意見を述べたり、遠慮のない苦言をいったりする。昨年第三回訪印のときには、技術計画、科学計画から教育計画についての問題を、齡(よわい)すでに七十三歳の恩師と連日数時間話し合った。こうしたことは統計だとか、計画だとかいうことに関係があるのだから、自分の専門分野に関連があるにはある。だから、当然の仕事といえ、それまでのことである。しかし、かくまでインド国の問題に深入りせずにはおれない自分自身を、客観的に眺めてみるならば、これは頭脳からくることなく、心情からくる方が、多いといわなければなるまい。なにかこの辺に、遊学の遊にあたるものが、底深いところで、利(き)いているのであろう。

遊学の遊には、学問からの遊離という面もないとはいえない。学問からの遊離などといえ、学者のくせに、怪(け)しからぬ申し分といわれるかも知れないが、正直のところ、認めざるをえない。毎年、毎月、毎日、同じ研究分野にとじこもって、そこにあらわれる世界中のあらゆる学術情報は、くまなく迅速にキャッチする。しかしその範囲外のこととなると、いくらか興味があっても、触手を出すようなこともできない。こういう研究態度は、多くのまじめな研究者の正道であることに、相違はない。しかし、もしかりに、職業人としての立場を離れて、自由にどの学問分野でも自由に出入してみろといわれたら、別の行き方もあろうというものである。しかし、こうした自由は、大衆で特定の講座をうけもつという責任ある地位につくと、いよいよもって、実際には、空想的な願

望に等しくなってくる。若いときは、学者としての地位を早く確立したいと思うのは、当然である。学者として一人前といわれるためには、自分で選択する自由はあるにしても、とにかく何か適当な学問分野を専攻領域として設定してかからなければならぬことが多い。漸くにして、学者としての地位が安定したと思われるころには、自分のものには、助教授もいれば、助手もいる、年少の研究者の卵もいる、大学院で指導をうけたいという学生もいる。こうなると、研究集団の指導者ということになり、指導者とカトップ・マネージャーという性格も、当然期待されるべき運命になる。多くの場合、そうなるべきであり、それでよいことであろう。しかしだからといって、いついかなる場合にも、この運命のもとにおかれるというのでは、果たして、探究者の責任をよく果たしうるのであろうか。

ときには、研究者は、集団を離れて個に立ちかえり、周囲におもんばかることなく、要すればひとりで道も模索する。この自由がどうしても必要なように思う。それならば、研究者は、いつでも、そういう心掛けで探検にのり出せばよい。周囲の者も、それをよく理解してやればよいということになる。しかし日本の大学の現況では、このことを実現するのは、実のところ、そう容易ではない。ともかく、周囲の環境から自分を切り離してかからないと、どうもいけないらしい。これが実現するためには、本来いるべき地位から離れて、どこかほかへ、流動してゆかなければならぬらしい。流動してゆくべきは、国内でもよいわけであるが、これはよほど思い切ってやらないと、相当の年

配以上になると、もろもろの雑事、煩惱が、あとをつきまとうのが、せまい日本の実状でもある。こうしたことまで経験してみると、海外遊学のありがた味が、はっきりしてくるのである。こうした意味で、思い出していつも感謝に思うのは、プリンストン大学での五ヶ月間の遊学生活である。一九五七年十二月から翌年の四月まで、雪に埋れた冬の生活である。このとき、わたくしは、プリンストン大学のウイルクス教授のお世話で、ロックフェラー財団の資金をうけた。講義の義務もなければ、研究の義務もない。勝手に自分で選んで、講義をきくのもよし、どのセミナーに出席してもよし、しなくてもよい。特定の学生をひきうけて、彼らの研究を聞いてやってアドバイスするなどという世話もしなくてもよい。全部の時間が本当に自分自身の時間であると思えたのは、四十年の研究生活のうちで、このとき以外にもまだないのである。

プリンストンは、静かな町である。毎日毎日、学生のとくと、変わりない。教室に出て講義をきくか、図書館に入りびたつて、たくさんの本を周囲にあつめて読みふける。自分の居室にいるときはこまごました雑用をするときだけである。こうした外観的には、平坦な日日の生活のなかで、行なわれたのは、実は急激な、あわたたしい精神活動である。どんな精神活動かといえば、いままでの自分の研究の方向から、何か壁をやぶって新しい方向を見出そうという運動である。それは特定の方向を指向するというのではない、本人は進むべき方向を指向したのであるが、まだその方向がわからない。この状況を、客観的に観察すると迷路になげこまれた鼠の動きに異なるまい。

忙しげな学習力、たよりない洞察力しかないのだから、いったい、どこから逃れ道があるのか、試行鎖誤をくりかえすほかはない。

絶えまなき前進

わたくしのように、不風流な男でも、ときに感興が切迫するときもある。しかし物臭でもあるかながながしい感想文などを書きのこすのは、苦手である。そのようなとき一首か二首かきのこしておく。このころの生活を、思い出させるものは、ただ次の短歌ひとつだけである。

踏みしめて 雪の細道 歩みおり

幼きときも かくてありにし

(プリンストン大学構内にて、一九五八年一月)

それは一月のおわりのころであった。プリンストンの冬は、緯度をみればすぐわかることだが、日本の北海道の冬に近い、相当の積雪がある。大学の講義やセミナーは、夕方六時近くまであることはそうまれではない。厚いオーバーにくるまりながら、少くし空腹を感じながら、大きな大学の構内を横切って、正門へ抜ける。この構内に、積雪をかきわけて雪の細道がつくられている。夕方になって、温度がさがると、靴の音がギューギューときしみ、何か雪を踏みしめて歩くという感じがいつそう強くなる。北海道に生まれてそこで中学時代までを送ったわたくしは、雪といえば、

すぐに幼少の時代を思い出さずにはおれない。そのころは、革靴もなければゴム靴もない。わらで編んだものだから、わら靴というしろものである。これが、午後三時すぎにはもう昏(くら)くなりかけた北国で、学校からの帰り道、ギューギューと音をたてる。四十余年たち、中学、高校と学生生活は進み、そしてはからずも大学の先生ともなった。いま歩む雪の細道は、むかしと同じきしみを心持よく立てている。無邪気にしかし、はりつめた向上心をもって通学した小学生のころと、いまこうして四十九歳ともなり異郷にあって大学の講義をきいて、講義の内容をくりかえし思い返し、家路を急ぐいまの自分とをくらべて見る。いつになっても、何かを学ばなければならぬ自分である。その点、小学生のころとなんの違いがあるだろうか。これが学者というものの宿命というものであろうか。真白い雪におおわれた風景は、光芒四十余年のもろもろのわずらわしさや迷いを、すべておおいつつみ、清白の世界を出現してくれている。

遊学は触媒機能

ひとは暗中模索するとき、はっきり模索にとりかかろうと自覚するとはかぎらない。このプリンストンの生活が、自分の研究方向を大きく変える起点となっていたことは、実は三、四年経てからやっと自覚するようになったのである。今になってみると、それまで二十年近く没頭してきた推測統計学のなかから、計画とか制御とかいう方へ接続してゆく方向をさがしていたのである。このよ

うな転回を、当時の研究活動のなかから析出してくるということは、あえて海外遊学の機縁をもたずとも、あるいは遅かれ早かれ、わたくしの場合も、起こりえたことであつたといえるかも知れない。起こりえたであろうと思う。しかしおそれくたいぶ遅れて起こつたに違いないと思つている。してみると海外遊学は、促進には役立っている。触媒機能をもつているようにも思われる。わたしの場合にはこのような転回がさらにもう一度起こつて情報科学への道となる。

日本の科学者は、待遇がめぐまれていないと、よくいわれる。そのために頭脳の海外流出という、憂慮すべき事態が、たびたび指摘される。こうしたなかでも、特に顕著な実例として、日本の数学者が米国にパーマネントの地位を得て帰らぬ例があげられる。何とかしなければならぬといわれている。しかし実をいうと、まだ誰も名案を出してくるひとがない。やがて数学界だけの問題ではなくなるだろう。このまじめな大問題が、いっこうに解決しそうもないのは、もどかしい。

そうした大問題にくらべると、以上は海外へ出張し遊ぶことは遊んだが、問題の流出はしなかつた例である。もっと優秀な遊びがあろうものをと、笑われる識者も多いことであろう。しかしわたくしだって、これからの機会もあろうし、まだまだ向上の余地はあろうというものである。